Doshisha Journal of Health & Sports Science, 7, 9-16（2015）

原　著

知的障害者[1)]スポーツ大会へのボランティア参加による障害者に対する意識変化に関する研究

藤田　紀昭[1]

Changes in attitudes toward people with intellectual disabilities after volunteer participation in sports events for people with intellectual disabilities

Motoaki Fujita[1]

The purpose of this study was to elucidate the changes in attitude toward people with intellectual disabilities that occur in people who volunteer at sports events for the intellectually disabled. This was investigated by volunteers' sex, age, number of times as a volunteer, and role. A questionnaire survey was given to 409 people before and after they volunteered at a sports event for the intellectually disabled. Responses were obtained from 250 people (61.1%). The results showed that volunteers' image of people with intellectual disabilities became more positive after participation, among both volunteers as a whole and by volunteer attribute.

By attribute, female and older volunteers had higher scores for number of times as a volunteer, and they had a more positive image of people with intellectual disabilities, but no large difference was seen based on volunteers' role.

【Keywords】People with disability, change of consciousness, image, volunteer activity, Nice Heart Foundation

本研究の目的は知的障害者のスポーツ大会のボランティア参加者の知的障害者に対するイメージの変化を性別，年齢，参加回数，役割別に明らかにすることである．知的障害者のスポーツ大会のボランティア 409 名にボランティア実施前と実施後にアンケート調査を行った．250 名（61.1%）から回答を得た．その結果，知的障害者スポーツ大会のボランティア参加者全体で見ても，属性別にみても，ボランティア実施後，知的障害者に対するイメージはより肯定的なものに変化していた．

属性別に見た場合，男女別では女性が，年代別では比較的年齢の高い層が，ボランティア参加回数では複数回参加者の得点が高く，障害者により肯定的なイメージを持っていた．役割別では大きな差は見られなかった．

【キーワード】障害者，意識変容，イメージ，ボランティア活動，ナイスハート基金

Ⅰ．はじめに

スポーツ基本法の前文には「・・・スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは，全ての人々の権利であり，全ての国民がその自発性の下に，各々の関心，適性等に応じて，安全かつ公正な環境の下で日常的にスポーツに親しみ，スポーツを楽しみ，又はスポーツを支える活動に参画することのできる機会が確保されなければならない」とある．スポーツを行うことが人々の権利であると同時に，スポーツボランティア等スポーツを支える活動がスポーツ活動の一つとして位置づけられ，推進されるべきものであることが謳われている．

近年スポーツボランティア実施率は 6%～ 8%で推移しており，大きく変化していないという報告がある（笹川スポーツ財団 2013）．一方で，東京マラソンを支えるボランティア 1 万人を公募したところ，2007 年の第 1 回大会のときは定員に達するまで約 2 か月半かかったものが 2014 年には 27 時間であったという報告もある（江上 2014）．東京オリンピックでは大会運営関係だけで約 8 万人のボランティアが必要とされている．2020 年オリンピック・パラリンピックに向けスポーツボランティアに対する関心は今後も高まっていくと考えられる．

（公財）笹川スポーツ財団によればスポーツボランティアとは「報酬を目的としないで自分の労力，技術，時間を提供して，地域社会や個人，団体のスポーツ推

1　同志社大学スポーツ健康科学部（Faculty of Health and Sports Science, Doshisha University）

1）　障害者の表記方法は議論があるが，本論文では各種法律に並い「障害者」と表記する．

進のために行なう活動」（笹川スポーツ財団 2000）である．そして，活動の内容により「イベント・ボランティア」と「コミュニティ・ボランティア」に分けられるとしている．スポーツボランティアは他のボランティア活動同様に，自発性，無償性，社会性，先駆性などの特徴をあげることができる．スポーツボランティアの活動が盛んになることはスポーツの普及，発展につながるだけではなく，地域づくりや街づくり，豊かな福祉社会への発展をも期待できる．

さて，少子・高齢化が進む中，社会の活力と安定を確保するためには，多様な個人が能力を発揮できる社会であること．さらに，自立して共に社会に参加し，支えあう，「共生社会」の形成の視点に立った施策の推進が重要である．「共生社会」は今日まで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害のある人たち等が，積極的に参加・貢献していくことが可能となる社会のことである．誰もが相互に人格と個性を尊重し，支え合い，人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会といえる．このような社会を目指すことは，我が国において最も積極的に取り組むべき重要な課題とされている（文部科学省 2012）．障害のある当事者のことを正しく理解し，肯定的なイメージを持つことは，共生社会実現において重要である．障害者スポーツを体験することで，実際には障害者と接することがなくても，障害者スポーツや障害者へのイメージがより肯定的になるという報告がある（安井 2004，永浜 2011，2012）．障害者スポーツのボランティアに注目する理由はここにある．障害のある人が参加するスポーツのイベント・ボランティアを行うことで障害のある人に対するイメージがどのように変化するのかを本研究では明らかにする．

障害者スポーツのボランティアに直接注目した研究にはボランティアの参加動機について明らかにしたものと，ボランティア従事者の障害者に対する意識に注目したものがある．松本（1999）や田引（2005，2008）はボランティアの参加動機に関与する因子として社会貢献に関わる因子やスポーツ関連因子，自己成長因子，個人的興味因子などがあることを明らかにした．そして，参加動機が活動経験年数や性別，年齢の影響を受けることや満足度や燃え尽き度に影響していることに言及している．

ボランティア活動に従事した人の障害者に対する意識に注目したものとしては高畑（2005），山田（2006），松本・田引（2009），李ら（2011），志賀・荒井（2013）などの研究がある．

高畑（2005）は精神障害者のスポーツのボランティアについて報告した．彼らが，ボランティア実施前は精神障害者に対して否定的であいまいな認識だったものが，ボランティア後にはその評価がよいものに変わったことを報告している．山田（2006）は車椅子バスケットボール大会のボランティアを行った人は活動前と比べて障害者に対する肯定的意識が高まったとしている．そして，障害者と直接的に関係を持つ機会が多いほどその変化が促進されることを報告している．松本と田引（2009）は知的障害者の大会に参加している指導者とイベント・ボランティアを比較した．その結果，知的障害者に対するイメージが両者の間で異なっていることを指摘している．李ら（2011）は障害者スポーツ大会のボランティア実施後はボランティア実施前と比較して障害者に対する意識がポジティブに変化していることを報告している．志賀と荒井（2013）は知的障害者のスポーツに関わるボランティアコーチの活動に対する促進要因と阻害要因についてインタビュー調査から明らかにしている．

これらの研究のうち，ボランティアを実施する前と後の障害者に対する意識の変化に注目した研究ではいずれも実施後に，よりポジティブなイメージを持つようになったことが報告されている．しかし，知的障害者スポーツのイベント・ボランティアに特化して，個人的属性ごとにイメージの変化をみたものはない．そこで本研究では知的障害者のスポーツ大会のボランティア従事者の知的障害者に対するイメージの変化を性別，年齢，参加回数，役割別に明らかにすることを目的とする．

Ⅱ．研究の方法

本研究の調査対象は公益財団法人国際障害者年記念ナイスハート基金および全日本自動車産業労働組合総連合会が主催する「ふれあいのスポーツ広場」狭山大会（2014 年 11 月 8 日）および磐田大会（同 11 月 9 日）にボランティアとして参加した人たち計 409 人である．本大会では午前中にロープ送り，リバース大玉ころがし，風船バレーの 3 競技，午後はユニバーサルストレッチ，じゃんけんダンスの 2 競技を行う．ボランティアは場外案内係，受付係，選手誘導係，競技進行係，競技用具係といった運営ボランティアと選手とともに競技を行う競技ボランティアに分かれる．午後の 2 競技は運営ボランティアも選手とともに競技に参加する．

調査は大会が開催された両日に実施した．調査票を開会式前に配布し，事前調査を行い，大会終了後に事後調査を実施し，その場で回収した．有効回収数は 250，回収率は 61.1％であった．

障害者スポーツの大会に参加するボランティアの知的障害者に対するイメージを測定するためには適切な

調査項目（態度測定尺度）を設定する必要がある．しかし，現在はまだ検討を要する段階といえる．そのため本研究では高畑（2005），山田（2006），松本と田引（2009），李ら（2011）を参考に項目を選定した．大会当日に調査を実施することから回答時間が短くならざるを得ない．そのため調査項目は「障害のある人はかわいそうな人だ」「障害のある人は暗い」「障害のある人は自分たちとは違う」「障害のある人は生活するのが大変」「障害のある人の暮らしは質素だ」「障害のある人と歩くのは恥ずかしい」「障害を理由とした差別は仕方ない」「障害の有無は友達になるのに関係ない」「障害の有無に関係なく支え合って生活すべき」「障害の有無は結婚に関係ない」の10項目にとどめた．回答は「非常にそう思う」「そう思う」「そう思わない」「全く思わない」の4段階尺度を用いた．回答の偏りの影響を避けるため設問項目のいくつかにおいて評価の方向を左右入れ替えて配置した．

回答結果は設問ごとに知的障害者に対して肯定的なイメージほど得点が高く（4点から1点）なるように回答をコーディングした．その後に，ボランティア実施前と実施後の得点の平均の比較を行った．比較は回答者全体および，性別（男・女），年齢別（40歳未満・40歳以上），本大会のボランティア参加回数（初参加・複数回参加），ボランティアの役割（運営ボランティア・競技ボランティア）ごとに事前，事後の平均を算出し，対応のある平均の差の検定を実施した．さらに，属性間に差があるかどうかの検討も行った．なお分析にはIBM　SPSS　STATISTICS　22を使った．

Ⅲ．結果

1）ボランティア参加者の属性

表1はボランティア参加者の属性を示している．ボランティア参加者の大半が男性であった．年代別では30代が最も多く（41.3％）以下，40代（30.6％），20代（19.8％）50代（7.9％）60代（0.4％）であった．20代と30代を合わせた比較的若い年代が61.1％，40代以上が38.9％であった．大会ボランティアの参加回数では初めての人が53.7％と過半数を占めた．役割別では場外案内係，受付係，選手誘導係，競技進行係，競技用具係といった運営ボランティアが59.2％，選手とともに競技を行う競技ボランティアが40.8％であった．

表1　ボランティア参加者の属性

		n	%
性別	男性	214	89.5
	女性	25	10.5
	n.a.	11	−
年齢	20代	48	19.8 } 61.1
	30代	100	41.3
	40代	74	30.6 } 38.9
	50代	19	7.9
	60代	1	0.4
	n.a.	8	−
参加回数	初めて	130	53.7
	複数回	112	46.3
	n.a.	8	
役割	運営ボランティア	130	59.2
	競技ボランティア	102	40.8
	n.a.	18	−

2）ボランティア参加者全体の事前・事後調査の比較結果

図1はボランティア参加者全体の事前・事後調査の比較結果である．10項目中8項目で障害者のイメージが肯定的なものへと変化しており，その内「障害のある人はかわいそうな人だ」「障害のある人は暗い」「障害のある人は自分たちとは違う」「障害のある人は生活するのが大変」「障害のある人の暮らしは質素だ」「障害を理由とした差別は仕方ない」の6項目で統計的有意差が見られた．

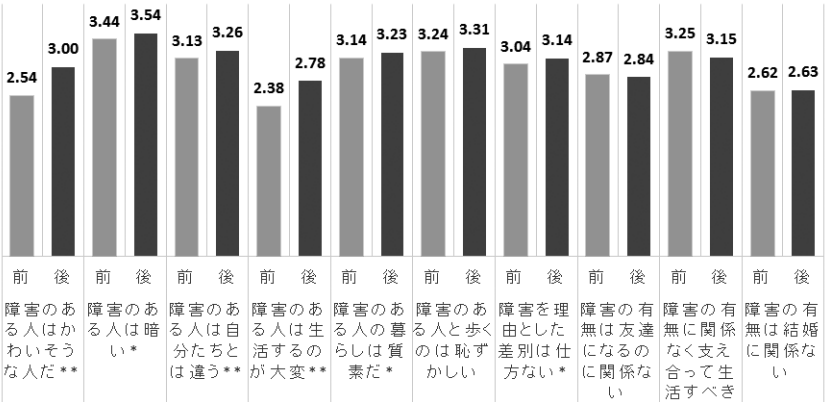

図1　ボランティア前後で見た障害者に対する意識の変化

*p < .05　**p < .01

表2　ボランティア参加者の性別にみた事前・事後調査の比較結果および男女間の差異

		平均（前）	SD	男女差	⇒	平均（後）	SD	男女差	男女別事前・事後変化	全体事前・事後変化
障害のある人はかわいそうな人だ	男	2.48	0.75	＊＊	⇒	2.97	0.80	—	＊＊	＊＊
	女	2.92	0.64		⇒	3.16	0.69		＊	
障害のある人は暗い	男	3.43	0.60	—	⇒	3.53	0.60	—	＊	＊
	女	3.44	0.58		⇒	3.64	0.57			
障害のある人は自分たちとは違う	男	3.12	0.66	—	⇒	3.26	0.66	—	＊＊	＊＊
	女	3.12	0.60		⇒	3.24	0.66			
障害のある人は生活するのが大変	男	2.34	0.78	—	⇒	2.76	0.81	—	＊＊	＊＊
	女	2.58	0.78		⇒	2.92	0.72		＊	
障害のある人の暮らしは質素だ	男	3.11	0.65	—	⇒	3.22	0.70	—	＊	＊
	女	3.32	0.63		⇒	3.36	0.64			
障害のある人と歩くのは恥ずかしい	男	3.22	0.69	—	⇒	3.33	0.67	—	＊	
	女	3.33	0.64		⇒	3.21	0.66			
障害を理由とした差別は仕方ない	男	3.03	0.78	—	⇒	3.15	0.74	—	＊	＊
	女	3.04	0.74		⇒	3.08	0.70			
障害の有無は友達になるのに関係ない	男	2.88	0.85	—	⇒	2.94	0.97	—		
	女	2.92	0.81		⇒	2.92	0.91			
障害の有無に関係なく支え合って生活すべき	男	3.25	0.75	—	⇒	3.15	0.87	—		
	女	3.44	0.58		⇒	3.28	0.89			
障害の有無は結婚に関係ない	男	2.61	0.85	—	⇒	2.60	0.85	—		
	女	2.64	0.70		⇒	2.80	0.65			

*p < 0.05　**p < 0.01

表3　ボランティア参加者の年代別にみた事前・事後調査の比較結果および年代間の差異

	年代	平均（前）	SD	年代間差	⇒	平均（後）	SD	年代間差	年齢別事前・事後変化	全体事前・事後変化
障害のある人はかわいそうな人だ	10-30 代	2.49	0.74	—	⇒	2.96	0.82	—	＊＊	＊＊
	40 代以上	2.60	0.76		⇒	3.05	0.71		＊＊	
障害のある人は暗い	10-30 代	3.40	0.62	—	⇒	3.53	0.62	—	＊	＊
	40 代以上	3.52	0.53		⇒	3.56	0.55			
障害のある人は自分たちとは違う	10-30 代	3.10	0.63	—	⇒	3.25	0.63	—	＊＊	＊＊
	40 代以上	3.19	0.68		⇒	3.27	0.73			
障害のある人は生活するのが大変	10-30 代	2.35	0.76	—	⇒	2.73	0.81	—	＊＊	＊＊
	40 代以上	2.42	0.72		⇒	2.88	0.79		＊＊	
障害のある人の暮らしは質素だ	10-30 代	3.10	0.65	—	⇒	3.21	0.70	—	＊	＊
	40 代以上	3.22	0.63		⇒	3.29	0.66			
障害のある人と歩くのは恥ずかしい	10-30 代	3.20	0.71	—	⇒	3.29	0.66	—		
	40 代以上	3.31	0.60		⇒	3.36	0.68			
障害を理由とした差別は仕方ない	10-30 代	3.05	0.78	—	⇒	3.12	0.75	—		＊
	40 代以上	3.00	0.76		⇒	3.16	0.71		＊	
障害の有無は友達になるのに関係ない	10-30 代	2.90	0.83	—	⇒	2.86	0.96	—		
	40 代以上	2.85	0.84		⇒	2.82	0.95			
障害の有無に関係なく支え合って生活すべき	10-30 代	3.25	0.73	—	⇒	3.16	0.85	—		
	40 代以上	3.30	0.76		⇒	3.16	0.91			
障害の有無は結婚に関係ない	10-30 代	2.57	0.87	—	⇒	2.57	0.85	—		
	40 代以上	2.71	0.77		⇒	2.71	0.80			

*p < 0.05　**p < 0.01

3）ボランティア参加者の男女別にみた事前・事後調査の比較結果および男女間の差異

表 2 はボランティア参加者の男女別にみた事前・事後調査の比較結果および男女間の差異について示したものである.

男性の場合「障害のある人はかわいそうな人だ」「障害のある人は暗い」「障害のある人は自分たちとは違う」「障害のある人は生活するのが大変」「障害のある人の暮らしは質素だ」「障害のある人と歩くのは恥ずかしい」「障害を理由とした差別は仕方ない」の 7 項目でいずれも統計的有意差が見られた．女性も 10 項目中 7 項目で障害者のイメージが肯定的なものに変化した．しかしながら, 統計的有意差が見られたのは「障害のある人はかわいそうな人だ」「障害のある人は生活するのが大変」の 2 項目であった.

男女間の比較では事前調査において 10 項目中 9 項目で女性の方が得点が高く，そのうち「障害のある人はかわいそうな人だ」で統計的有意差が見られた．事後調査では 10 項目中 7 項目で女性の方が得点が高かった．しかし，統計的有意差が見られた項目はなかった.

男女別では男女いずれもボランティアによって障害者に対するイメージは肯定的なものに変化する傾向が見られたが男性にその傾向がより顕著であった．男女の比較では事前調査において女性の方が男性よりも障害者に対してより肯定的なイメージを持っている傾向が見られたが，事後調査においてその差は縮小した.

4）ボランティア参加者の年代別にみた事前・事後調査の比較結果および年代間の差異

表 3 はボランティア参加者の年代別にみた事前・事後調査の比較結果および年代間の差異を示している.

10 代から 30 代の比較的年齢の低い層では 10 項目中 7 項目で障害者のイメージがより肯定的なものへと変化していた．このうち「障害のある人はかわいそうな人だ」「障害のある人は暗い」「障害のある人は自分たちとは違う」「障害のある人は生活するのが大変」「障害のある人の暮らしは質素だ」の 5 項目で統計的有意差が見られた．40 代以上の比較的年齢の高い層も同じ 7 項目で障害者のイメージが肯定的なものに変化していたが，統計的有意差が見られたのは「障害のある人はかわいそうな人だ」「障害のある人は生活するのが大変」「障害を理由とした差別は仕方ない」の 3 項目であった.

年代の比較的低い層と高い層との比較では事前・事後調査とも比較的年齢の高い層の方が得点が高い傾向が見られたが，いずれも統計的有意差はなかった.

年代別では年齢の低い層，高い層いずれもボランティアによって障害者に対するイメージは肯定的なものに変化する傾向が見られたが年齢の低い層にその傾向がより顕著であった．年代間の比較では事前・事後調査とも年齢の比較的高い層の方が低い層よりも障害者に対してより肯定的なイメージを持つ傾向が見られたが，いずれも統計的な有意差は見られなかった.

5）ボランティア参加者の参加回数別にみた事前・事後調査の比較結果および参加回数間の差異

表 4 は本大会へのボランティア参加者の参加回数別にみた事前・事後調査の比較結果および参加回数間の差異を示している.

今回が初めての参加となるボランティアでは 10 項目中 7 項目で障害者のイメージがより肯定的なものに変化していた．そのうち,「障害のある人はかわいそうな人だ」「障害のある人は暗い」「障害のある人は自分たちとは違う」「障害のある人は生活するのが大変」「障害のある人の暮らしは質素だ」「障害を理由とした差別は仕方ない」の 6 項目で統計的有意差がみられた．逆に「障害の有無に関係なく支え合って生活すべき」は否定的なイメージに変化し，統計的有意差が見られた．複数回本大会のボランティアを経験している人では 7 項目で障害者のイメージが肯定的なものに変化していたが，統計的有意差が見られたのは「障害のある人はかわいそうな人だ」1 項目のみであった.

今回が初めての人と複数回の人の比較では事前調査において 10 項目中 8 項目において複数回参加の人の方が得点が高く，そのうち「障害のある人は生活するのが大変」で統計的有意差が見られた．事後調査においても 7 項目で複数回参加の人の方が得点が高かったが統計的有意差はいずれもなかった.

ボランティアの参加回数別ではでは今回が初めての人，複数回参加の人のいずれもボランティアによって障害者に対するイメージは肯定的なものに変化する傾向が見られた．中でも初めての人にその傾向がより顕著であった．参加回数間の比較では事前・事後調査とも複数回参加の人の方が初めての人よりも障害者に対してより肯定的なイメージを持っている傾向が見られた.

6）ボランティア参加者の役割別にみた事前・事後調査の比較結果および役割間の差異

表 5 はボランティア参加者の役割別にみた事前・事後調査の比較結果および役割間の差異を示している.

運営ボランティアでは 10 項目中 8 項目で障害者のイメージがより肯定的なものに変化していた．そのうち,「障害のある人はかわいそうな人だ」「障害のある人は自分たちとは違う」「障害のある人は生活するのが大変」「障害のある人の暮らしは質素だ」「障害のあ

表4　ボランティア参加者の参加回数別にみた事前・事後調査の比較結果および参加回数間の差異

	参加回数	平均（前）	SD	回数間差	⇒	平均（後）	SD	回数間差	回数別事前・事後変化	全体事前・事後変化
障害のある人はかわいそうな人だ	初めて	2.52	0.74	—	⇒	2.98	0.79	—	＊＊	＊＊
	2 回以上	2.70	0.73		⇒	3.15	0.67		＊＊	
障害のある人は暗い	初めて	3.43	0.60	—	⇒	3.55	0.59	—	＊	＊
	2 回以上	3.45	0.51		⇒	3.45	0.69			
障害のある人は自分たちとは違う	初めて	3.11	0.64	—	⇒	3.26	0.66	—	＊＊	＊＊
	2 回以上	3.25	0.72		⇒	3.25	0.64			
障害のある人は生活するのが大変	初めて	2.32	0.77	＊＊	⇒	2.75	0.80	—	＊＊	＊＊
	2 回以上	2.95	0.69		⇒	3.10	0.79			
障害のある人の暮らしは質素だ	初めて	3.11	0.64	—	⇒	3.22	0.69	—	＊	＊
	2 回以上	3.35	0.67		⇒	3.45	0.61			
障害のある人と歩くのは恥ずかしい	初めて	3.22	0.68	—	⇒	3.31	0.66	—		
	2 回以上	3.30	0.66		⇒	3.40	0.68			
障害を理由とした差別は仕方ない	初めて	3.00	0.78	—	⇒	3.13	0.73	—	＊＊	＊
	2 回以上	3.40	0.68		⇒	3.20	0.83			
障害の有無は友達になるのに関係ない	初めて	2.89	0.83	—	⇒	2.83	0.96	—		
	2 回以上	2.80	0.95		⇒	3.05	0.95			
障害の有無に関係なく支え合って生活すべき	初めて	3.30	0.69	—	⇒	3.17	0.87	—	＊	
	2 回以上	3.00	1.08		⇒	3.05	0.89			
障害の有無は結婚に関係ない	初めて	2.78	0.85	—	⇒	2.60	0.84	—		
	2 回以上	2.80	0.83		⇒	2.90	0.79			

*p < 0.05　**p < 0.01

表5　ボランティア参加者の役割別にみた事前・事後調査の比較結果および役割間の差異

	役割	平均（前）	SD	役割間差	⇒	平均（後）	SD	役割間差	役割別事前・事後変化	全体事前・事後変化
障害のある人はかわいそうな人だ	運営ボランティア	2.56	0.74	—	⇒	2.98	0.75	—	＊＊	＊＊
	競技ボランティア	2.44	0.73		⇒	2.97	0.83			
障害のある人は暗い	運営ボランティア	3.42	0.62	—	⇒	3.53	0.59	—		＊
	競技ボランティア	3.45	0.57		⇒	3.56	0.62			
障害のある人は自分たちとは違う	運営ボランティア	3.15	0.63	—	⇒	3.28	0.61	—	＊	＊＊
	競技ボランティア	3.07	0.68		⇒	3.21	0.73			
障害のある人は生活するのが大変	運営ボランティア	2.43	0.78	—	⇒	2.81	0.80	—	＊＊	＊＊
	競技ボランティア	2.26	0.78		⇒	2.68	0.79			
障害のある人の暮らしは質素だ	運営ボランティア	3.03	0.64	＊	⇒	3.18	0.70	—	＊	＊
	競技ボランティア	3.24	0.64		⇒	3.29	0.68			
障害のある人と歩くのは恥ずかしい	運営ボランティア	3.17	0.68	—	⇒	3.31	0.66	—	＊	
	競技ボランティア	3.27	0.68		⇒	3.28	0.69			
障害を理由とした差別は仕方ない	運営ボランティア	3.05	0.76	—	⇒	3.16	0.69	—		＊
	競技ボランティア	3.01	0.79		⇒	3.10	0.81			
障害の有無は友達になるのに関係ない	運営ボランティア	2.88	0.81	—	⇒	2.75	0.95	—		
	競技ボランティア	2.93	0.83		⇒	2.97	0.95			
障害の有無に関係なく支え合って生活すべき	運営ボランティア	3.28	0.77	—	⇒	3.12	0.89	—	＊	
	競技ボランティア	3.25	0.65		⇒	3.24	0.82			
障害の有無は結婚に関係ない	運営ボランティア	2.62	0.82	—	⇒	2.64	0.83	—		
	競技ボランティア	2.59	0.85		⇒	2.61	0.85			

*p < 0.05　**p < 0.01

る人と歩くのは恥ずかしい」の5項目で統計的有意差がみられた．逆に「障害の有無に関係なく支え合って生活すべき」は否定的なイメージに変化し，統計的有意差が見られた．競技ボランティアでは「障害の有無に関係なく支え合って生活すべき」を除く9項目で障害者のイメージが肯定的なものに変化していたが，統計的有意差はいずれも認められなかった．

運営ボランティアと競技ボランティアの比較では事前調査において10項目中6項目において運営ボランティアの人の方が得点が高かった．逆に競技ボランティアの方が得点が高かった4項目のうち「障害のある人の暮らしは質素だ」の1項目で統計的有意差が見られた．事後調査においても6項目で運営ボランティアの人の方が得点が高かったが統計的有意差はいずれもなかった．

役割別では運営ボランティア，競技ボランティアのいずれもボランティアによって障害者に対するイメージは肯定的なものに変化する傾向が見られた．運営ボランティアにその傾向がより顕著であった．役割間の比較では事前調査において統計的有意差が見られた項目があったがほぼ差異はないといってよい結果であった．

Ⅳ．考察

本研究では知的障害者のスポーツ大会のボランティア参加者の知的障害者に対するイメージの変化を性別, 年齢, 参加回数, 役割別に明らかにした．その結果, 知的障害者スポーツ大会のボランティア参加者の知的障害者に対するイメージはボランティア実施後，より肯定的なイメージに変化していた．この結果は精神障害者のスポーツを対象にした高畑（2005）や身体障害者のスポーツを対象とした山田（2006），全国障害者スポーツ大会プレ大会のボランティアを対象とした李ら（2011）の研究と同様の結果であった．障害のある当事者の支援を経験したり，活動を共にしたりすることが障害者のイメージを肯定的なものに変えていくことが明確になったと言える．

男女別に結果を見てみると，男性，女性とも事後調査では得点が高くなっていた．中でも男性は事前調査の得点が女性より低かったが，事後調査ではその差が小さくなった．障害者や障害者スポーツに対して男性よりも女性の方が肯定的なイメージで見る傾向があることは藤田（2003，2013）の研究でも明らかにされている．今回は障害者スポーツボランティアを行うことでその差が小さくなる可能性が示唆された．

年代別，ボランティア参加回数別でもボランティア参加後得点が高くなっており，ボランティア従事が障害者のイメージを肯定的にすることが示唆された．そして，年代別では比較的年齢の高い人が，障害者スポーツボランティアへの参加回数別では複数回のボランティア参加者の得点が事前，事後とも高い傾向が見られた．若い年齢層では障害のある人と接する機会が少ないことや，ボランティアを重ねることで障害のある人に対するイメージが肯定的になってくることがその要因だと推察される．

役割別では運営を担当する運営ボランティアと選手と一緒に競技に参加する競技ボランティアの間で大きな差は見られなかった．山田（2006）の研究では障害者と接する時間の長い人ほどイメージが肯定的になることが報告されている．今回の調査では競技ボランティアは午前中，午後とも選手と一緒に競技を行うことからより肯定的なイメージを持つことが予測された．しかし，結果は必ずしもそうとは言えないものであった．これは運営ボランティアも午後は選手と一緒に競技に参加すること，午後の競技は選手との交流を目的とした内容であることから両者の差が予測したほどではなかったと考えられる．

今回の調査の質問項目の中で「障害の有無は友達になるのに関係ない障害の有無は友達になるのに関係ない」「障害の有無に関係なく支え合って生活すべき」「障害の有無は結婚に関係ない」の3項目では事前，事後で得点が低くなるケースが見られた．この３項目は回答者の回答の偏りをなくす目的で評価の方向を入れ替えて設定した質問項目である．回答のための時間が短かったことから回答者がこの点に気づかないまま回答した可能性が考えられる．

Ⅴ．まとめ

本研究では知的障害者のスポーツ大会のボランティア参加者の知的障害者に対するイメージの変化を性別，年齢，参加回数，役割別に明らかにした．その結果，次のことが明らかになった．

1）回答者全体では10項目中8項目で障害者のイメージが肯定的なものへと変化していた．その内「障害のある人はかわいそうな人だ」「障害のある人は暗い」「障害のある人は自分たちとは違う」「障害のある人は生活するのが大変」「障害のある人の暮らしは質素だ」「障害を理由とした差別は仕方ない」の6項目で統計的有意差が見られた．

2）男女別では男女いずれもボランティアによって障害者に対するイメージは肯定的なものに変化した．中でも男性にその傾向がより顕著であった．男女の比較では事前調査において女性の方が男性よりも障害者に対してより肯定的なイメージを持って

いた．しかし,事後調査においてその差は縮小した．

3） 年代別では年齢の低い層，高い層いずれもボランティアによって障害者に対するイメージは肯定的なものに変化した．中でも年齢の低い層にその傾向がより顕著であった．年代間の比較では事前・事後調査とも年齢の比較的高い層の方が低い層よりも障害者に対してより肯定的なイメージを持っていた．いずれも統計的な有意差は見られなかった．

4） ボランティアの参加回数別では今回が初めての人，複数回参加の人のいずれもボランティアによって障害者に対するイメージは肯定的なものに変化した．中でも，初めての人にその傾向がより顕著であった．参加回数間の比較では事前・事後調査とも複数回参加の人の方が初めての人よりも障害者に対してより肯定的なイメージを持っていた．

5） 役割別では運営ボランティア，競技ボランティアのいずれもボランティアによって障害者に対するイメージは肯定的なものに変化した．運営ボランティアにその傾向がより顕著であった．役割間の比較では事前調査において統計的有意差が見られた項目があったがほぼ差異はないといってよい結果であった．

今回の研究で障害者スポーツのボランティア活動が障害のある人のイメージをより肯定的にすることが明らかになった．また．ボランティアの属性別に見ることでその変化の違いを明らかにすることができた．

しかしながら，今回の調査では回答時間が短いことなどから質問項目を 10 項目にとどめざるを得なかった．今後は質問項目を増やし因子分析等を行いより詳細かつ多角的に結果の考察ができるようにすること，またどのようなボランティア活動がより障害のある人のイメージを好転させるのかを見ていく必要がある．

参考文献

江上いずみ（2014）「冬季オリンピック大会におけるオリンピック教育の実践に関する調査　ボランティア教育」，嘉納治五郎記念国際スポーツ研究・交流センター．（http://100yearlegacy.org/Olympic_Movement/education/pdf/volunteerEducation.pdf　2015 年 1 月 19 日閲覧）

藤田紀昭（2003）「障害者スポーツの授業が大学生の態度に与える影響に関する研究」日本福祉大学社会福祉論集 108，45-54.

藤田紀昭（2013）「（公財）日本体育協会スポーツ指導者資格所有者の障害者スポーツに対する意識に関する研究」同志社スポーツ健康科学 5，9-21.

李在檍・中村圭子・栄長敬子（2011）「障害者とボランティア活動に対する学生の意識変化－ボランティア参加者の調査結果から－」新潟星陵学会誌 3（2），25-30.

松本耕二・北村尚浩・國本明徳・仲野隆士（2004）「スポーツ・ボランティアの参加動機，組織コミットメントと継続意欲一地域の障害者スポーツ団体を支えるボランティア」山口県体育学研究，13-22.

松本耕二（1999）「スポーツ・ボランティアの類型化に関する研究（障害者スポーツイベントのボランティアに着目して）」山口県立大学社会福祉学部紀要 5，11-19.

松本耕二・田引俊和（2009）「障がい者スポーツを支えるボランティアからみた知的障がい者のイメージと日常生活における意識・態度」山口県立大学学術情報 2, 27-38.

文部科学省（2012）「中央教育審議会初等中等教育分科会（第 80 回）　配付資料」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1325884.htm　2015 年 1 月 19 日閲覧）

永浜明子・藤村弘子（2011）アダプテッド・スポーツ体験による大学生の意識変化に関する事例報告（第Ⅰ報）－アダプテッド･スポーツ導入に向けた授業評価の観点から－，大阪教育大学紀要　第Ⅴ部門 60（1），39-49.

永浜明子（2012）アダプテッド・スポーツ体験による大学生の意識変化に関する事例報告（第Ⅱ報）－アダプテッド･スポーツ導入に向けた授業評価の観点から－，大阪教育大学紀要　第Ⅴ部門 60（2），31-44.

野村一路（2002）「障害者スポーツにおけるボランティア～長野パラリンピックを通して～」体育の科学 52（4），299-298.

笹川スポーツ財団（2000）『スポーツライフデータ 2000（スポーツライフに関する調査報告書）』笹川スポーツ財団.

笹川スポーツ財団（2012）『スポーツライフデータ 2012（スポーツライフに関する調査報告書）』笹川スポーツ財団.

田引俊和（2005）「知的障害者のスポーツ活動を支えるボランティアの参加動機に関する研究」医療福祉研究 1，85-93.

志賀真珠美・荒井弘和（2013）「スペシャルオリンピックスのボランティアコーチの活動に関連する要因」スポーツ産業学研究 23（2），241-247.

田引俊和（2008）「障害者スポーツを支えるボランティアの参加動機に関する研究」医療福祉研究 4，98-107.

高畑隆（2005）「精神障害者に関する意識上のバリアの研究」埼玉県立大学紀要 7，9-13.

山口泰雄（編）（2004）『スポーツ・ボランティアへの招待　新しいスポーツ文化の可能性』世界思想社.

山田力也（2006）「障害者スポーツボランティア活動者の意識変容を役割構造に関する研究」西九州大学・佐賀短期大学紀要 37，11-18.

安井友康：車椅子バスケットボールの交流体験が障害者のイメージに与える影響，障害者スポーツ科学 2（1），25-30，2004.

四ツ谷年晴（2002）「障害者スポーツにおけるボランティア」体育の科学 52（4），304-308.